

この問題は、難しい言葉が多いですが、聞かれているポイントは一つです。

「ものの本質は、現実のものとは別世界に存在するのか、それとも現実のものの中に存在するのか」

プラトンとアリストテレスは、ここで意見が分かれます。

1. まず、文章をやさしく言い換える

引用文では、次のような話がされています。

世の中にある目に見えるものは、すべて変化します。

たとえば、

- 人は年を取る
- 花は咲いて枯れる
- 建物は古くなる
- 水は流れ続ける

このように、感覚で捉えられるものは、ずっと同じ状態ではありません。

これがヘラクレイトスの考え方です。

すべてのものは絶えず流転している。

「流転」とは、絶えず変化することです。

川の水が同じ場所にとどまらないように、世界のものはすべて変わり続ける、というイメージです🌊

2. なぜ「変わらないもの」が必要なのか

ここで問題が生まれます。

仮にすべてが変化してしまうなら、私たちはどうして確かな知識を持てるのでしょうか。

たとえば、今日の猫と明日の猫がまったく別物になってしまうなら、

「猫とはどのような生き物か」

という知識を作れません。

学問では、ある程度変わらないものを対象にしなければなりません。

そこでプラトンたちは、次のように考えました。

目に見えるものとは別に、変化しない本質が存在するはずだ。

この変化しない本質が、プラトンのいうアイデアです。

3. 「感覚されるもの」とは何か

引用文の「感覚されるもの」とは、

目で見たり、耳で聞いたり、手で触れたりできる具体的なもの

です。

たとえば、

- 目の前にいる一匹の犬
- 教室にある一つの机
- 庭に咲いている一本の花
- ある特定の人間

などです。

これらには共通点があります。

それは、すべて個別的で、時間とともに変化することです。

目の前の犬は成長し、老い、やがて死にます。机も傷ついたり、壊れたりします。

したがって、感覚されるものは、

具体的だが、変化し、完全ではないもの

だと考えられています。

4. 「普遍的なものあるいは諸定義」とは何か

一方、「普遍的なもの」とは、多くの個別的なものに共通するものです。

たとえば、ポチ、ハチ、コロという三匹の犬がいたとします。

三匹はそれぞれ違います。

- 毛の色が違う
- 大きさが違う
- 性格が違う

それでも、私たちは三匹をすべて「犬」と呼びます。

なぜなら、三匹には共通する「犬であること」があるからです。

この「犬であること」のように、多くのものに共通する性質が普遍的なものです。

また、「犬とは何か」「正義とは何か」「勇気とは何か」という問いに対する答えが、引用文のいう諸定義です。

つまり、

言葉	意味
感覚されるもの	目の前にある具体的な一つ一つのもの
普遍的なもの	多くの個物に共通する性質や本質
諸定義	「〇〇とは何か」を言葉で明らかにしたもの

という関係です。

5. ソクラテスは何をしたのか

ソクラテスは、さまざまな人に、

- 「勇気とは何ですか」

「正義とは何ですか」

「善い人とはどのような人ですか」

と質問しました。

つまり、個別の例ではなく、すべての場合に共通する定義を探そうとしたのです。

ただし、引用文でアリストテレスは、

ソクラテスは、普遍的なものや定義が独立して存在するとは言わなかったと説明しています。

ソクラテスは「正義とは何か」を探しましたが、

「正義そのものが、人間の世界とは別の場所に存在する」

とまでは言わなかった、ということです。

6. プラトンのイデア説

プラトンは、ソクラテスが探していた普遍的なものを、現実の個物から切り離しました。

そして、

普遍的な本質は、感覚される個物とは別に、独立して存在すると考えました。

これがイデア説です。

たとえば、現実にはさまざまな三角形があります。

手書きの三角形は、線が少し曲がっていたり、角度がずれていたります。完全な三角形を現実を描くのは難しいです。

それでも、私たちは「完全な三角形」を頭の中で考えられます。

プラトンによれば、この完全な「三角形そのもの」が、三角形のイデアです。

現実の三角形は、三角形のイデアを不完全に写したものだと考えます。

同じように、

- 美しいものの背後には「美そのもの」
- 正しい行為の背後には「正義そのもの」

- 多くの人間の背後には「人間そのもの」

が存在するとされます。

プラトンの世界観

プラトンは世界を、おおよそ二つに分けます。

感覚される世界

私たちが目や耳で捉える世界です。

ここにあるものは変化し、壊れ、不完全です。

イデアの世界

理性によって理解される世界です。

イデアは変化せず、永遠で、完全なものです。

つまり、プラトンにとって本当に存在するといえるのは、むしろイデアのほうです。

現実の美しい花は枯れる。

しかし「美そのもの」は枯れない。

という考え方です🌸

7. アリストテレスは何を批判したのか

アリストテレスも、「ものには本質がある」という点は認めます。

しかし、

本質を現実のものから切り離し、別世界に置く必要はない

と考えました。

たとえば、プラトンは、

現実の馬とは別に「馬そのもの」というイデアが存在する

と考えます。

一方、アリストテレスは、

馬の本質は、現実存在する一頭一頭の馬の中にある

と考えます。

「馬の本質」だけが、どこか別の世界で生活しているわけではありません🐾

これが両者の大きな違いです。

8. アリストテレスの「ウーシア」とは

ウーシアは、日本語では「実体」「本質存在」「基本存在」などと訳されます。

知識ゼロから考えるなら、

それ自体で現実存在している、基本的なもの

と理解するとよいです。

たとえば、

- 「人間一般」ではなく、現実にいるこの人
- 「猫一般」ではなく、目の前にいるこの猫
- 「木一般」ではなく、庭に生えているこの木

が基本的な存在です。

「白い」という性質だけでは、単独で存在できません。

必ず、

白い猫
白い机
白い服

のように、何かが白いのです。

それに対して、猫や机などの個物は、性質を支える主体として存在します。

したがって、アリストテレスは具体的な個物を、基本的なウーシアとして考えます。

9. 「形相」と「質料」

アリストテレスの考え方をもう少し正確に理解するには、「形相」と「質料」が重要です。

質料

ものを作っている材料です。

銅像なら、銅が質料です。

形相

そのものを、そのものとして成り立たせている構造や本質です。

銅像なら、「どのような像であるか」という形や構造が形相です。

ただし、形相は単なる外見ではありません。

生物の場合には、

その生物がどのような働きをし、どのように生きるものなのか

という本質まで含みます。

現実のものは、形相と質料が一緒になって存在します。

たとえば、現実の犬は、

- 身体を作る物質
- 犬としての構造・性質・働き

が一体になっています。

アリストテレスは、犬の本質を犬から切り離して、別世界に置きません。

本質は個物の中に内在している

と考えるのです。

10. プラトンとアリストテレスの違い

同じ「犬」を例にすると、違いが分かりやすいです。

プラトン

現実の犬とは別に、永遠不変の「犬のアイデア」が存在する。

目の前の犬は、そのアイデアを不完全に表したものです。

アリストテレス

「犬の本質」が、現実の犬とは別に独立して存在するわけではない。

犬の本質は、一頭一頭の現実の犬の中に実現しています。

	プラトン	アリストテレス
本質のありか	個物とは別に存在する	個物の中に存在する
感覚される個物	不完全で変化するもの	現実の基本的存在
普遍的なもの	アイデアとして独立して存在する	多くの個物に共通するが、別個に独立しない
世界の捉え方	感覚界とアイデア界に分ける	現実世界の個物を中心に考える

11. 特に重要な対立

この問題でいちばん大切なのは、次の違いです。

- プラトンは、本質を個物から「分離」した。

アリストテレスは、本質を個物の中に「内在」させた。

「分離」と「内在」は、答案で使うと評価されやすい言葉です🌟

プラトンは、感覚される個物が変化するため、確実な知識の対象となる変化しないアイデアを、個物とは別に設定しました。

アリストテレスは、普遍的な定義を知ることの重要性は認めます。しかし、その普遍的なものの自体が、個物とは別に独立して存在するとは考えません。

私たちは一頭一頭の犬を観察し、そこから共通する本質を理解します。

つまり、

存在するのは具体的な個物であり、学問が捉えるのは個物に内在する普遍的な本質という考え方です。

12. 答案を書くときの構成

この問題では、次の順番で書くとまとまりやすいです。

① 感覚されるものを説明する

感覚される個物は、具体的であるが、絶えず変化する。

② プラトンを説明する

変化する個物からは確実な知識が得られないため、普遍的な本質や定義を個物から切り離し、永遠不変のアイデアとして独立させた。

③ アリストテレスを説明する

普遍的な本質の存在意義は認めるが、それが個物から離れて独立して存在することは否定した。

④ ウーシアを説明する

現実存在する個物が基本的な存在であり、その個物を成立させる形相・本質は個物の中に内在する。

13. 模範答案

プラトンは、感覚される個物は絶えず変化するため、確実な学的認識の対象にはならないと考えた。そこで、複数の個物に共通する普遍的な本質や定義を、感覚される個物から切り離し、永遠不変で独立して存在するアイデアとした。感覚される個物は、アイデアを不完全に写し、あるいはアイデアに参加するものとされる。

これに対してアリストテレスは、普遍的な本質や定義が認識に必要であることは認めるが、それらが個物から分離して独立に存在するとは考えない。基本的に存在するウーシアは、現実存在する具体的な個物であり、その個物をそのものとして成立させる形相・本質は、個物の中に内在している。したがって、プラトンが普遍的なものを感覚されるものから分離したのに対し、アリストテレスは、普遍的な本質を感覚される個物の中に求めた。

14. 一文で覚えるなら

プラトンは「本質は別世界にある」と考え、アリストテレスは「本質は現実の個物の中にある」と考えた。

この一文を中心にして、「変化する感覚物」「永遠不変のアイデア」「個物に内在する形相・本質」という言葉を加えれば、しっかりした答案になります📦🌟